

軍隊回顧録

―ビルマ戦線、初戦の思い出―

徳島県 岡 文雄

昭和十三（一九三八）年夏、日本男子として避けて通れない兵役検査を受けた。身長に比べ体重がなく、甲種でなく乙種合格。昭和十四年四月十三日、多勢の村人に送られ、入隊するため徳島で一泊、同僚三人で、兵営まで出かけてみたが、その練兵場では演習する兵隊の姿はなかった。

五月一日午前八時、営門前には、千二百人の者が道路いっぱい集合している。私は、第一中隊に割り当てられ、五班軽機班となる。

中隊長は「ただ今より、お前たちの父親となる。母代りは班長、兄代わりは古兵である。お前たちは忠節を尽くし、礼儀を重んじ、質素を旨とし、初心を忘れず、兵隊らしくやれ。なお古兵たちは、他中隊では私的制裁が行われているが、当中隊で

は、絶対やってはならない。肝に銘じて置け。自愛を持って接し、一日も早く、一人前の兵隊にして、有事に備えよ」とのことだった。

入隊一、二日は、兵舎班内・その他施設の説明、軍規、内務班の状況、諸規則の説明。三日目は、三種混合の注射後は無理に寝かされ、何もせずの状態であったが四日目を過ぎると、がぜん変ってきた。

厳しい内務規則に、戦場の状況を加え、それはそれは、厳しさを超えた厳しさであった。早飯早糞、古兵の食器洗い、編上靴の手入れ、寢床の敷き上げ等に、時間がいくらあっても足りない。中隊長の私的制裁ならぬといった事はいっただけで、隣の班、自分の班から、怒声とビンタの音が聞こえて、騒がしくなる。

覚えていて良かったことは、軍人勅諭の暗唱だ。中隊長の精神訓練には「忠誠・礼儀の項、暗唱できる者あるか」と必ず質問がある。それを指名され、班名・氏名を大きな声で言って、暗唱出来れ

ば、班長も全部いるし、以後の学科は、一応及第である。

外に銃剣術と射撃である。剣術は青年学校でやっていた。百人中二、三番であった。射撃は正直いって駄目。今考えると、その時から乱視で、実弾射撃では的に弾は当たらなかった。

入隊三カ月目に星二つの一等兵となり直ぐ補充兵が入隊した。かくして一応は古兵となる。食器も洗ってくれるし、編上靴の手入れもだ。初年兵教育の当番兵となる。班長当番とちがいが、演習が終わると鞆を持って下宿先まで靴磨きに行き、雑用をする。兵隊は兵営から娑婆に出るのが無性にうれしい。

初年兵係を約一年して事務室要員となる。人事係の日報や給与係の軍曹の助手である。給与係軍曹は、兵や下士官の給料を渡すだけで、事務は助手が全部やった。そんなことで、日曜外出の時、延刻をもらって家に帰ったものである。

上等兵の二年目も終わりに近づき、満期の話の

出るころの十月になって、兵長という階級が出来、同年兵三人が進級した。同時に、面会・外出禁止、さらに、第一大隊に自転車六百台が支給された。

満期の話は完全に吹っ切れ、新たに編成があり、夏服が支給され、銀輪部隊として南方行きと分かった。

昭和十六年十一月十五日、派遣のため屯営を出発する。極秘のため、夕刻、蔵元駅で乗車、宅間港で輸送船「善洋丸」に乗船、玄界灘を通過するころにはやはり一抹の寂しさを感じた。

十二月八日、タイ国ターペー沖に集結、私たちは平和進駐が目的のため、戦史には小戦闘しか書かれていないが、実際には大きな戦いもあった。私たちの第一大隊は、誘導艦の先導により、予定の泊地に進入、投錨。このころ、天候は急変して雨を伴う突風は暗夜の海上に吹き荒れた。

この時点で、平和進駐か武力進駐か決定していない南方軍本部から、暗号電報が入る事になって

いたが、ビブ首相の所在がつかめず、遂に時間切れとなり武力進行となる。

暁部隊の手で海面におろされた上陸用舟艇には操舵手と助手が乗り込み、本船の舷側に太いロープの網が垂らされ、網の目に靴先をひっかけ下り始める。私も網の目に靴先をひっかける。下を見ると、舟艇が寄ってまたスーッと離れる。高さは二、三メートルあり、高波の波頭に舟艇が浮き上がる。「それ飛べー」とジャンプすると助手が抱き止めてくれる。タイミングを誤った者が海中へドボン。すばやく差し出す竹竿をつかみ舟に引き上げられる者もある。

小隊五十四人、分隊ごとに移乗完了すると舟艇は本船の周囲を回っている。一個中隊の移乗完了には一時間を要した。中隊は四隻の舟艇にて出発体が冷えて小便がしたくなる。

八時ごろ、進入口らしい七、八メートルの芦の生えた河らしいものを見つけ、椰子・バナナを見ながら進む。前方から三十人余り盛装した男女が

乗った舟とすれ違った。鉄帽をかぶり銃をもった私たちを見て、なんと思った事だろう。

やがて、棧橋らしきものがあり、一番乗りの私たちが「タイ」国の土を踏む。先ず朝食をと飯盒を取り出した途端、「パーン！」と一発小銃音がして、素早く小屋を飛び出して、その方向に体制を整える。見ると前方五百メートルに兵営がある。中隊長が、六十人余りの兵を連れてやってきた。大隊長は、まだ到着せず。敵方を見ると、大砲を引き出し、弾丸を肩にした兵が右往左往している。今の内にと、低姿勢で突き進む。

大砲の発射音もするが、高い椰子の木に当たり、物凄い炸裂音がするだけだ。さらに進むと、大砲の両横に軽機関銃を据え撃っている所に出た。小隊長が、あれに突撃するという。擲弾筒に掩護射撃させるため駆け足で下がる。二人連れて元の所に帰る。しかし小隊長の様子がおかしい。やられたかと思ひ、駆け寄るその横に、同年兵の鉄帽が首の後ろに垂れて即死している。小隊長はと見る

と腹部が軽機関銃にやられている。

小隊長には担架が必要だ。その時、停戦命令が出たのを知った。飛んで来る弾も少なくなつた。私は上陸地点に下がり担架と衛生兵を連れて、小隊長の下に戻る。幸いにも、腸の間を弾が貫通していたため、入院。その後、手当の甲斐あつて二カ月で治癒、退院して、追求してきた。この戦闘での戦死は七人だった。

この戦闘で第二大隊はプラチャップキリガンへの上陸戦で別動隊が通信施設を撃破したため停戦命令が達せられず、三十余時間の戦闘となり、戦死五十一人。また、第九飛行場中隊の乗艇が敵の直撃弾を「エンジン」に受け、三十五人全員が戦死した。第三大隊はチュンポン上陸戦で陸岸に近づいたところ、海底は深い泥沼で上陸が困難、全員泥沼を泳ぐようにして上陸した。軍旗は第九中隊と共に、泥海から三百メートルほど南の木造の栈橋らしい所から上陸。この上陸戦で、中隊長以下十二人が戦死した。

昭和十六年十二月二十一日、ビルマ侵攻作戦準備のため、バンコクに集結。昭和十七年一月一日、私たちは、自転車部隊として、国境の町メソードに向う。その道中は人が通つた形跡もない悪道・急坂続きで、自転車に乗れた道程は少しで、四日を要した。

野営には象や虎の鳴き声も聞こえ、「絶対、離れて寝るな」と注意があつた。タイの道先案内人は靴を脱ぎ、紐でくくり合せて首に掛け素足で歩く。

タイ国境通過は、昭和十七年一月二十日、私たちの小隊長は馬場中尉になり、ビルマに進攻することになった。私たち五十四人は、橋はすでに爆破されていたので川に沿つて、四キロ上流に到達した。十メートルばかりの谷があり水は胸まであつた。敵がいるやもと緊張して一個分隊は服を着たまま渡つたが、敵もいなかったもので、後の者は禪一つで渡り、一列になつて山中を進む。

突然、軽機関銃で先頭を行つた分隊長が頭をや

られ、出血多量で衛生兵長が、戦友の血を採って輸血をする。同じ血液型で無くとも混ぜる薬があって、緊急の処置らしかった。分隊長の体重は七十キロもあるので、天幕で急造の担架を作り、四人で担いで日暮れ時に、中隊に復帰した。

(私が内地に帰った時、徳島陸軍病院にいたが、見舞いに行くも、首をかき上げて考えるが、私を思い出せなかった)

これよりモールメンに向って、連隊は行動を起した。ここは敵の重要拠点とあって、イギリス兵が守っている。日照続きで田園は白く乾き、大きく裂けて足に響く。弾丸も余分に携行していて、ひどく疲れてきた。

私が、ロバを見つけ「小隊長、乗って下さい」というと、人情深い馬場中尉は「私は大丈夫。弱っている兵を乗せ」という。兵の装具を乗せていくことにした。小さな部落より少し離れた所で野宿する。私が、歩哨割をしようとすると、小隊長が「歩哨はよい。私が起きている」という。現地

人の話では静かで敵の気配もないようで、私と小隊長二人でおきていることにしたが日が落ちると、やはり眠くなる。

私は、朝の冷気に目が覚め、小隊長も鼾をかいている。見渡すと、隊員も死んだように寝ている。集合をかけ、人員を調べると、矢川上等兵がいない。小隊長が「集合ラッパを吹け」という。一回吹くと、矢川が、家の中から走り出てきた。無歩哨で、事故も無かったのである。

モールメンは、第二、第三大隊が攻撃し、私たち第一大隊はサルビン川を渡り、モールメンの敵が敗走してくるのを待ち受けた。一抱もある材木を道に横たえた。

十二時ごろ、砂煙を上げて五台の装甲車が、軽機関銃を撃ちながら走ってくる。我が方も、一斉攻撃をする。先頭車は、倒れそうになりながら、材木を飛び越して逃走する。他の車は、道路上に停止、軽機の銃口は空に向いている。

マルタバン占領は昭和十七年二月十日で、これ

より部隊はベグーに向った。ベグー攻撃は、普通寺連隊で、第一大隊は、その予備隊となる。その時、我が軍の戦車が十台余り到着して英軍戦車に発砲。見事に命中するが、その戦車は、装甲が厚くて、弾を受付けない。やがて、敵の砲は日本軍戦車に向け発射された。瞬時に燃え上がり、一台が逃げ帰った。その内、敵が退却。私たちは、ラングーンに向うが、命令変更になり、引き返し、マンダレーに向う。

昭和十七年三月二十二日、私たち第一大隊はナンチャン攻撃を命ぜられ、水の無い小さな川を進む。右側が竹藪で、私たちの小隊は前方の灌木の中に陣を取る。この戦闘は、今までに無い苦戦で、三日間、多数の敵に包囲され、重機も弾不足で連射が出来ず、敵の姿が見えても五、六発ずつしか撃てなかった。

そんな状態だった時、三島重砲が来てくれた。命令に「〇時〇分から三島重砲が発射するから、全員、両目・両耳を指で押さえて待て」という。

やがて時間通り初弾が発射された。それは未だ聞いたことのない大きな音で、腹の底に沁み込むように、それが連続で発射される。四門ぐらいの数だった。敵の砲弾も飛んできたが、敵砲弾がやがてうち負けて沈黙した。その重砲の威力で、あれほど多くいた敵も、潮が引くごとく逃げ去ったのである。

昭和十七年三月二十八日、ナンチャン占領、退却した一部がエダッセに陣を敷いているとの情報で、私たち中隊が攻撃することになり、私たち小隊が先兵として、二日目にエダッセに着き、ここから散開して進む。突然、小高い所から雨あられの射撃を受け、その弾が土煙を上げて、突き刺すように体の周囲に飛んでくる。友軍の掩護射撃があつて、五十人中負傷者もなく、エダッセを占領した。

昭和十七年四月二十日、マンダレー攻略戦に進む。二十メートルは優にある舗装道路を、何万という大部隊が、押しつ押しされつ、後になり先にな

り、マンダレー城に殺して行く。

空には、百機を越える友軍機が銀翼を重ねて、ビルマ北辺へ飛んでいく。

ところが、奇怪千万なことに、私たち第五十五師団がマンダレー入口まで着くと、軍司令部から入城ストップの命令が下った。四国の第五十五師団が東部ビルマの主役でありながら首都ラングーンに続き、古都マンダレーへの入城もストップをかけられた。

その理由は伝わりるところによると、第五十五師団長が、満州で憲兵司令官をしていたころ、現第十五軍司令官の非違行為を職権により戒めた、そのはらいせだったとのことだった。

マンダレー郊外で待機中、連隊に新たな任務が課せられ、昭和十七年五月九日、五百キロ奥地の要害ミートキーナに進攻することになり、私たち第一大隊は、舟艇でイラワジ川を遡航、戦闘もなく昭和十七年五月十九日、バモーに上陸、二十七日、ミートキーナに進攻、敵は国境線へ敗走し、

英軍の残したテニスコート付の官舎に分屯することとなった。

以上で、北部ビルマ全作戦は終了した。昭和十七年五月二十六日より十二月二十九日までの警備駐屯は内地兵営と同じで、日曜の外出もあり、軍旗祭も挙行された。私は、ミートキーナでマラリアを発病し、二カ月入院し、昭和十七年九月二十八日、中隊復帰した。

昭和十七年十二月、私たち第一中隊の生き残り四年兵十一人が「満期要員」となる。文字にするのと四文字だが、大きな、大きな、感情が含まれる。

私たちは、夢にまで見た内地・日本に帰る事が出来る。手を叩き、喜びたいところだが、後に残る百六十人の者は、新たな戦場に行くのである。それを思うと、すまないと思う気もするのである。

【解 説】

体験記筆者は、大正七（一九一八）年三月、勝

浦町で岡照雄の長男として誕生、横瀬町立尋常高等小学校を卒業する。その後、横瀬生比奈産業学校を経て横瀬町勸業課農業技術員見習となり、農協の前進である横瀬町信用組合書記などを勤める。

「私は、タバコは吸わず、酒も好きでない。甘い品には目がない。そんな関係で、胃が悪く身長に比べ体重がなく、徴兵検査も第一乙になったのだろう」と述懐する。

そして昭和十四年四月、現役兵として歩兵第四十三連隊に入隊する。同連隊は通称「錦第二四三五部隊」で第十一師団に属する。

続いて昭和十六年九月、臨時編成下令により歩兵第四百四十三連隊（壮第八四一六部隊）第一中隊に編入され、十一月十五日、ビルマ派遣のため宅間港から「善洋丸」にてタイ国ターペー国に集結した。

太平洋戦争開戦前における南方方策の中でタイ国に対する外交戦略は重要なものであった。タイ国を日本の陣営に引き入れ、これが安定確保を図

ることは、長期持久作戦遂行の上においても絶対不可欠の要件であった。しかし同国の動向は、当時のピブン首相の親日的態度と独裁力に期待する部分が多かったものの、同国の複雑な国内情勢、さらにイギリス側の出方も懸念の要因でもあった。

体験記にも記されているごとくタイ国が厳正中立を標榜している中で、南方軍では友好進駐実現のため中部タイへの進駐を八日正午まで遅らせている。そして当時の戦闘の体験を書いているが、八日正午には、タイ国は日本軍の通過容認並びに、これに伴う便宜供与、さらには日・タイ両軍の衝突回避についての了解が成立している。かくして南方軍ビルマ作戦を担当する第十五軍下で第三十三師団と共に、所属する第五十五師団が進駐を開始した。

昭和十八年十月十二日、五年五カ月の軍隊生活を終えたが、昭和二十年一月、臨時召集により歩兵第四百四十三連隊補充隊に応召、第二中隊付きで那賀大野村での作業中隊に所属することになり、

内地防衛に就き、同年九月十四日小松島で召集解除、復員する。

ビルマ戦線といえば、ニューギニアと共に太平洋戦争時の悲惨な戦場として思い出される。当時、部隊は苦闘はするものの連戦連勝、負け戦は知らないで、内地に帰っている。

そんな中で、いわゆるビルマ戦線の敗戦前後の苦労や後退に後退を続けた惨状の体験はない。ただ終戦後の戦友会で聞いた、その後のビルマ戦線の実情を次のごとく語ってくれた。

「昭和二十年ごろより、武器弾薬食糧の補給、意のごとくならず、形勢逆転、転進（敗退）が多くなってきた。ペゲー集結では、毎日降雨の中、泥塗れの行軍で、靴は破れ、服は千切れ、綴れを縫い、靴底は擦り切れ、生身の素足で歩く。

道端で眠っている兵士を、死んでいると思って、靴を脱がし始めると、『俺は未だ生きているんだ。欲しかったら、死んでから取れ』と言われ、慌てて去って行った兵もある。被服以上大切だったの

が、食糧と手榴弾であり、誰しものが欲しがっていた。

二カ月余りで、師団の集結も終わり、次は絶対に越さねばならない難所、シッターン河の渡河である。山を下りる道路上には、敵戦車と歩兵がいて、通る事が出来ない。豪雨で、大海原となった田圃を胸まで漬かり、（日本と覚しき東の方向に）落ち延びて行く。

そのころ、ビルマは、至る所に反乱軍がいて、どの部落にも容易に近づく事も出来ない。必死に落ち延びて行く。

足に当たる物がある。それは、先に出発した将兵の精根尽き果てた遺骸であり、それがまた、道標にもなった。

飢えと疲労を乗り切ってシッターン河に着く。銃と剣は持っているが、将兵の髪髭は茫々で、体は、骸骨に皮を被せたような姿になって、そんな体で、泳ぎの心得が有ろうと無かろうと、丸裸になって、地獄の河に身を投じて行くのである。

大型筏に乗ったのは、軍旗と一部の本部要員のみ。他の将兵は、四、五人の組みとなり、竹五、六本の小さな筏を作り、装具を積み、身を託して行くのである。

数日来、上流地点で渡った他部隊の内、精根尽き果たし、溺死した屍体が「ガス」で膨張し、胴体が一抱えにも膨れ上がって、腹を上に向け、流されて来た何万の将兵の死体で埋め尽くされていた」

航空整備兵

—終戦の年の心召—

神奈川県 山田 富 続

昭和十九（一九四四）年五月、小生が勤務していた高座海軍工廠総務部人事課において、ある日突然、上司より「君は当廠の基幹要員なので兵役延期の申請をしておいたから了解してもらいたい」と告げられた。小生もそれほど期待されているのかと少々照れたが「そうですか、ありがとうございます」と回答しておいた。

戦局は緒戦の勢いを失い、今や一億総決起と神州不滅の思いを信じながら、毎日銃後の守りと軍需品生産に粉骨碎身、各人汗して戦っていた。

昭和十九年七月に入り、当局より町役場を通して矢継ぎ早に左記のような通達指示あった。

七月三日 徴兵検査に関する通達事項

七月二十八日 壮丁皆泳鍛錬訓練 一日